第71回日本小児保健協会学術集会　特別講演2

いのちの長さ・重さ・深さを考える
～アフリカ・ケニアの療育現場から～

公文　和子（シロアムの園）

背　　景

持続可能な開発目標（SDGs）は2015年に定められ，2030年までにさまざまな地球規模課題目標を達成することを通して，「誰一人残さず」未来のある子どもたちが笑顔で成長できる世界を目指している[1]。しかし，現実に子どもたちの置かれている環境は，貧困，戦争，虐待など，子どもたちのいのちが守られているとは言い難い。経済が発達し，さまざまな制度があり，機会が保証されている日本の子どもたちも必ずしも幸福であるわけではない。

本稿では，子どもたちのいのちの長さ・重さ・深さを，筆者の紛争地，貧困国などでの活動経験から，障がいなどの個々の特性，置かれている社会背景，人とのつながりなどの観点から考察する。

考　　察

いのちの長さ

筆者が2001年に活動を行っていた西アフリカのシエラレオネは，1961年にイギリスより独立後，1991年から2002年の10年以上にわたり内戦状態にあった[2]。当時の平均寿命は51歳[3]，5歳未満の死亡率は218（出生1000あたり）[4]であり，戦禍によりいのちの長さが著しく影響を受けることを示している。

また，2002年から現在まで活動する東アフリカのケニア共和国においては，小児死亡率などがここ数十年で低下して健康状態が改善しており，2002年に86（出生1000あたり）であった5歳未満死亡率も，2022年には半分以下の41まで改善している[5]。しかし一方で，障がい児（者）は医療サービスへのアクセスが限られ，社会的な差別偏見のために障がい児殺害などの現状もあり[6]，寿命は著しく短く，SDGsの「誰一人取り残さない」と提唱される「ひとりひとりの大切ないのち」という概念からは程遠い。

いのちの重さ

筆者は1999年，パレスチナのヨルダン川西岸地区での活動経験がある。現在はパレスチナとイスラエル間の戦禍にあるものの，1993年のオスロ合意後[7]，当時は和平期間であった。しかし，ヨルダン川西岸地区エリコの幼稚園行事において，パレスチナ兵とイスラエル兵の戦いの最後にイスラエル兵の体には剣が刺さり，軍が全て殺害されるシーンを園児たちが演じ，その母親たちが拍手喝采する場面に遭遇した。家族・知人に多くの犠牲者が出ているという背景を考えると第三者が批判することはできないが，幼少時にいのちの重さや大切さを教育することができない環境に心を痛めた。

いのちの深さ（豊かさ）

筆者は2015年に障がい児の包括的ケアと共生社会を目指す事業「シロアムの園」を設立した。

ケニアの障がい児の殆どが，適切な医療や教育を受ける機会を得ることができず，社会保障・福祉・医療保険制度の不備により，経済的にも追い込まれている。また，地域社会における迷信や語り伝えなどにより差別偏見も強く，家族を含む社会的問題を多く抱えている。それにより家庭崩壊が起こり，更に貧困が進み，

Presented by Medical*Online

精神的・社会的問題が助長される。そして，上記の状況と併せ，インフラ未発達や社会参加機会が乏しいため，多くの子どもたちが家に閉じ込められている現状がある。シロアムの園はこのような子どもたちやご家族に寄り添い，真のニーズを共に考えつつ，リハビリ，医療，教育，心理，社会的などさまざまな通所サービスを提供する。子どもたちやご家族にとっての居場所をつくり，それぞれが特別で大切なひとりであることを感じることができるよう共に歩んでいる。また，子どもたちの生きる社会は，日本とは違う文化や制度の背景があり，さらに急速に進む高度経済成長期において，子どもたちを中心にみんなが笑顔で共に生きることができるケニアらしい社会をつくるというビジョンを掲げている。

データとして示すことは困難であっても，障がい児の健康において事業の介入により，摂食栄養の改善，疾患予防，疾患時の早期対処などを通して，いのちの「長さ」が改善していることをこれまで経験している。また，家族支援や地域への啓発活動などを通して，障がい児のいのちの意味を今一度考え，その「重さ」の見方が変化してきている。とは言え，シロアムの園でも多くの子どもたちが亡くなり，いのちの意味が顧みられないことも多い。そのような中で，「深いいのち」を豊かに生きることの重要性も強調したい。

脳性麻痺のＧの一例から考える。Ｇは新生児仮死による低酸素脳症で脳性麻痺とてんかんがあり，十分なケアを受けることができず，社会的にも差別偏見を受けながら生きていたところ，11 歳でシロアムの園に入園。痙性が非常に高く，摂食も困難で家族の苦労も想像できた。療育事業の中でリハビリや摂食訓練などはもちろんのこと，スタッフや友人たちと深い関係を築き，これまでできなかった遊び，遠足，行事，家族交流など新しい経験を積むことができた。また社会の偏見に対する家族の態度の変化などを通して，さまざまな社会参加の機会を得ることができるようになった。2023 年，誤嚥性肺炎で死亡したが，その後も母親はこの子育ての経験を活かして，他の障がい児へのケアボランティアに参加した。16 年間の短いいのちではあったものの，他者と共に生きることができた時間は，他者の人生にもポジティブな影響を与え，多くの人たちを愛し，愛された豊かないのちを生きることができた一例である。

図 1　シロアムの園の障がい児と家族，アーティストによって描かれた壁画

結　　語

世界で起こるさまざまな社会背景において，いのちの長さ，重さ，深さを考えていくことは小児保健の分野において非常に重要である。写真の壁画の牡丹の花は，シロアムの園の子どもたちがそれぞれご家族と一緒に，一枚一枚の花弁をそれぞれの思いで作成した。その個性的な一枚一枚の花びらがひとつの花をつくる時に，同じ色の花びらの牡丹よりも更に美しいものをつくることができ，個々の強みが生かされ，いのちが豊かにされ，社会自体が美しいものとなる（**図 1**）。

文　　献

1）“国際連合　持続発展な開発目標”．https://sdgs.un.org/goals
2）https://en.wikipedia.org/wiki/Sierra_Leone
3）“世界保健機関データ”．https://data.who.int/countries/694
4）“世界銀行データ”．https://data.worldbank.org/indicator/SH.DYN.MORT?locations=SL
5）“国際連合児童基金”．https://data.unicef.org/country/ken/
6）Rodríguez P, Ahern L, Bradshaw J, et al. Infanticide and Abuse: Killing and confinement of children with disabilities in Kenya. Disability Rights International 2018.
7）https://en.wikipedia.org/wiki/Oslo_I_Accord

Presented by Medical*Online